

ドレナージ施行中患者の下着の工夫

3階東病棟

○小松 由香 小笠原須奈子 谷村須賀子
 南 美穂 中越 伸代 喜多かおり
 釣井 京子

I はじめに

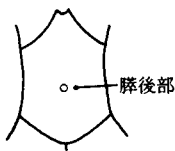
当病棟では、消化器疾患の術後、出血の早期発見、吻合部の減圧、死腔内の貯留液、浸出液や膿の排出などの目的の為、腹部ドレナージを施行する患者が常時5～15名と比較的多い。ドレーンを適切に管理することは、術後の回復過程に重要な位置を占める。

一方、ドレナージ施行中患者は、排泄、衣服の着脱操作、寝起き、歩行など日常生活のあらゆる面で拘束を受ける。そのため、身体的精神的にも苦痛が大きく、患者個々のニーズに添った看護上の工夫が必要となってくる。術直後は、全ての患者にT字帯が用いられているが、創部の治癒促進、早期離床とともに従来患者が着用していた下着を着用したいと希望する者が少なくない。看護サイドにおいても、患者が従来の下着の着用により早期離床がすすむのではないかという期待が持たれていた。そこで今回、患者の基本的ニーズである適切な衣類を選択するという点に着目し、ドレナージ施行中患者の下着の工夫を試みたのでその結果について報告する。

A 氏 ♂ (胃癌)

71才 S.62.6.9 (胃全摘術)

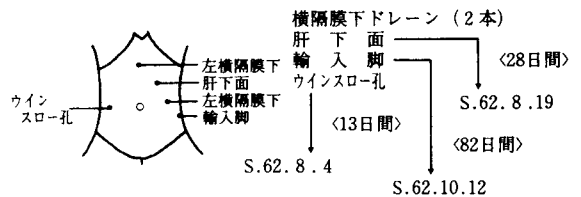
臍後部ドレーン
 <64日間>



S.62.8.12

B 氏 ♂ (胃粘膜下腫瘍)

60才 S.62.7.22 (胃全摘術
 脾臓摘出術)



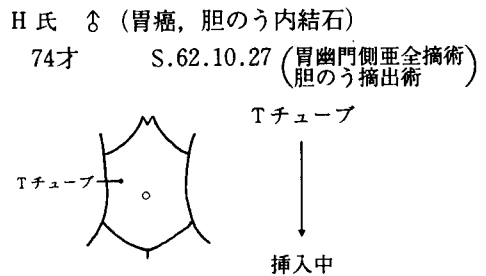
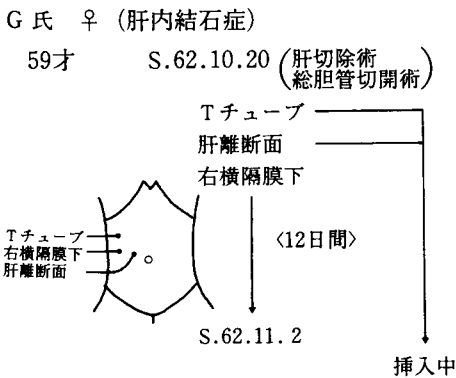
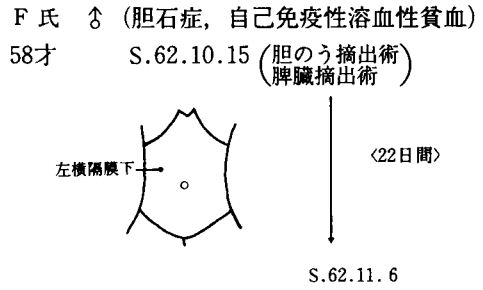
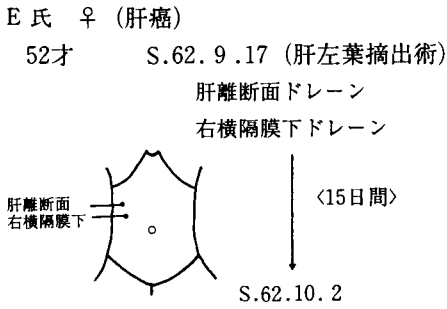
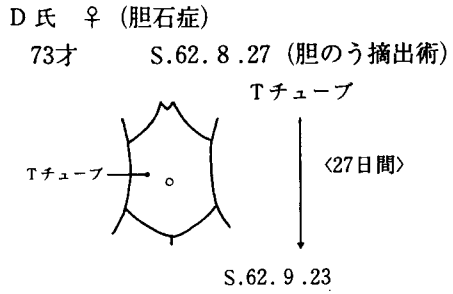
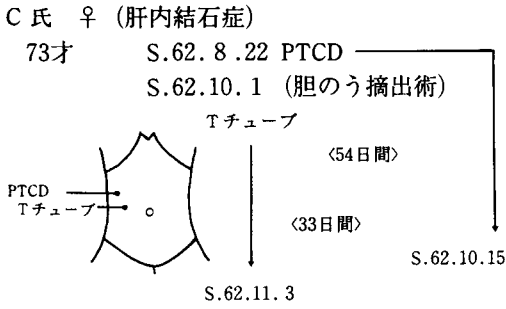


図 I 対象者のドレナージチューブ挿入部位

II 研究方法

1. 期間：昭和62年7月～昭和62年9月

2. 対象：腹部ドレナージ施行中で離床を開始した患者のうち、パンツを着用することに
関心を示した者

3. 研究方法

<第1段階>

ドレナージ施行中患者の下着としての従来のT字帯、パンツの利点、欠点についての
検討

<第2段階>

改良パンツの考案、作製

<第3段階>

改良パンツの試着および患者の感想

III 実施および結果

<第1段階>

ドレナージ施行中の患者がブリーフや中高年向きのパンツを着用する場合は、ドレーン
が障害となり、普通の状態ではパンツを着用することが困難である。また、ドレーンの管理
面からも種々の問題が出てくる。そこで、ドレナージ施行中患者の下着としてのT字帯、
パンツの利点、欠点を実際に患者の意見を参考にして各々挙げてみた。

従来のパンツの利点としては、1) 着用し慣れている為扱いやすい。2) 保温性吸湿性
に富む。3) 活動的である。4) 色、デザインが豊富であり好みに合った型を選択できる。
欠点としては、1) ドレーンの固定の障害となる。2) ドレーンの屈曲、閉塞、捻転、圧
迫のおそれ大きいなどが挙げられた。

T字帯の利点としては、1) ドレーンの固定の妨げとならない。2) 着脱が容易である。
欠点としては、1) 露出度が大きく、保温性に乏しい。2) 活動的でない。3) 排泄時布
端が便器に落ちる。4) 特に女性の場合、着用し慣れていない為扱いにくいなどが挙げら
れた。

<第2段階>

患者にとって安楽で扱いやすく、看護面においても適正なドレーン管理ができるパンツ
のデザインを検討し作製した。容易に作製できるよう従来のパンツに改良を加えて、5種

類のパンツを考案した。

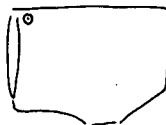
- (1) ひもで固定



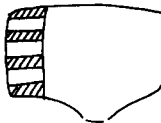
- (2) マジックテープで固定



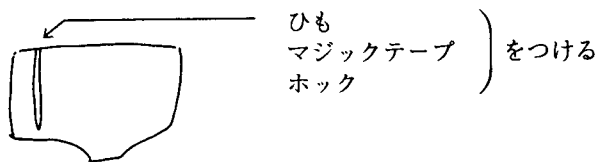
- (3) ホックで固定



- (4) 数本のゴムテープで固定



- (5) 個々の患者のドレーン固定部位に合わせて脇の裁断部をずらす



※ 左側にドレーンが挿入されている場合は
左側を裁断する。

図II 5種類の改良パンツ

- (1) ひもで固定

ドレーンが挿入されている側のサイドを、下端を残して裁断し、裁断部をまつた。

上部はゴムの端にひもを縫いつけ、裁断部にドレーンを通し、上部をひもで結び固定した。

(2) マジックテープで固定

ひもで固定する場合と同様に裁断し、上部の端にマジックテープをつけた。

(3) ホックで固定

ひもで固定する場合と同様に裁断し、上部の端にホックをつけた。

(4) 数本のゴムテープで固定

ドレーンが挿入されている側のサイドから中心に向けて数cm布を切除し、そこに数本のゴムテープを横に渡し、それぞれホックをつけ、取り外しできるようにした。ドレーン挿入、固定部は、患者によって様々であるが、このデザインの場合は、ドレーン挿入中のほぼ全ての患者に用いることができる。

(5) 個々の患者のドレーン固定部位に合わせて脇の裁断部をずらす。この場合も上部の固定は、ひも、マジックテープ、ホックとが考えられるが、患者のドレーンの固定部位に応じて裁断部位をずらす。

<第3段階>

前記の5種類のパンツをドレナージ施行中患者5名に実際に試着してもらい、意見、感想を述べてもらった。

1の場合、ひもパンツは、パンツの利点に加えて、原型により近い。ウエストがしまり過ぎない。洗濯に耐え得る。安価で簡単に作製できるなどの利点があり、最も患者に好評で患者自身もこのひもパンツを作製し着用する者がみられた。

2の場合、マジックテープは片手で外せるなど着脱が容易であるが、洗濯により接着効果が低下した。

3の場合、ホックは外す場合は容易であるが、止める場合老人など手先の器用さの低下がみられる患者には向かないこと、側臥位になった場合ホックが皮膚に当たって痛いという欠点がある。

4の場合、数本のゴムテープの場合は付け外しが面倒であること、装着時の安定性、保温性が低下するという欠点が挙げられた。また、下端ホックは体動時にすれて痛みを伴うという意見があった。

5の場合、裁断部を個々の患者に合わせてずらすものは、男性のブリーフの場合、縫い

合わせ以外の場所を裁断しなければならなくなり、作製の手間がかかるということが挙げられた。

IV 考 察

衣服の性能にはいくつか挙げられるが、その中でも保温性、着用時の快、不快、着用後の運動による快、不快、着脱の不自由さなどや、着用する者の主観的、心理的な問題、材質の強さや、仕立ての確実さなどによる耐久性がある。特に下着においては上記について満たされている事がよい下着といえる。今回の改良パンツも上記の機能を満たし、かつドレナージという特殊な状態を考慮した結果、1のひもパンツがひもを結ぶという程度の器用さは要求されるが、自然なパンツの装着感が得られ、術後の腹部を圧迫する事なく調節が可能であり、保温性や耐久性に富み、作製が容易であるなどの点から、現時点においては最も好ましいパンツではないかと思われる。この改良パンツを着用する事により、ドレナージ施行中であっても、衣服性能のよい下着を身につける事ができ、患者自身のニードを満たす事ができた。

また、日常生活に近い状態での排泄動作などが可能となり、ドレナージ施行中患者の離床及び行動範囲を拡大する事につながった。

しかし、実際に改良パンツを作製、着用しその効果や結果について述べてくれた患者は、9人中5人にすぎなかった。後の4人の患者は改良パンツについて耳は傾けてくれたが、実際に着用したいという希望は聞かれなかった。その理由として、ドレナージの必要性がわからずに従来のパンツを着用していたり、ある男性患者では健康時よりT字帯を着用していて違和感を感じる事がなかったり、ベッド上安静が強いられたり行動範囲が限られていたために、T字帯でも不満がなかったなどの意見を聞く事ができた。この事から、年齢、性別、ドレナージの位置、過去の生活習慣の違いなど個性に応じたパンツの工夫が必要で、患者及び家族に対する指導の際には、これらに留意した上で改良パンツの作製方法、意義について指導していく事が必要である。

ドレーンの管理面においては、改良パンツを着用する事により適正なドレナージを行う事ができた。

V おわりに

今回の試みにより、ドレナージ施行中患者の安楽の追求、行動範囲の拡大、ドレナージの適正な管理に良い結果が得られた。また、この働きかけにより下着に対し関心を示し、自主的に改良パンツを作製し着用している患者がみられるようになった。

今後、個々の患者に応じたパンツの工夫を続け、患者自身がドレナージの必要性、自己管理方法を充分理解できるよう、患者の立場に立った指導を心がけ、一層努力していきたい。

〈参考文献〉

- 1) 金山栄子他著：「消化器外科における腹腔ドレーン管理の実際」臨床看護，第10巻，第6号，p 776～p 783，1984年
- 2) 川島みどり著：生活行動援助の技術，第2集，看護の科学社，p 36～p 62，1978年
- 3) 中村恵子，大塚恵子著：「ドレナージ施行中の患者ケア」臨床看護，第10巻，第6号，p 769～p 775，1984年
- 4) Virginia Henderson Glays Nite 著：看護の原理と実際Ⅲ，基本的ニードと援助，メジカルフレンド社
- 5) 昭和58年度近畿地区看護研究会—集録—